

私がタバコを吸い始めたのは、高校1年生のときでした。最初は、ただ単に格好つけでのほったり吸いでした。はっきり言って当時は、おいしいと思って吸ってなかったと記憶しています。よく学校のトイレや屋上、部室などで隠れて吸っていました。家に帰るとはっぴりの格好だけだったので吸っていませんでした。しかし時がたつにつれて段々やめられなくなり高校3年生の頃には、タバコがないといらいらすくらいの超ヘビースモーカーになっていました。悪い事にタバコを買うお金がない時には、生徒から取り上げたタバコなど保管してある生徒指導の先生の部屋にもぐりこみそこから取った事もありました。また父のタバコを拝借する事もしばしばありました。一種のニコチン依存症に近いものがありました。怖いです。最初は単なる格好つけのつもりが段々日常生活の一部になっていったのですから。そんな私も高校を卒業してコンピューターの専門学校に入学する事になりました。専門学校は、高校とはやはり違いきちんと喫煙コーナーがあり堂々と吸えました。しかし、そこでたむろしてタバコを吸っている姿は評判がかなり悪く、タバコを吸わない生徒は、近づきたいものがあつたそうです。私もその頃は、逆にタバコを吸わない生徒が嫌いでした。お互いが人種差別しているかの様でした。そんな私に、転機がおきたのは、ある一人の女性の出現でした。私は、その女性に一目惚れをしたのでした。その女性は専門学校でも一、二を争う人気の女性でした。色々な男子生徒が告白しては、断られといった感じでした。その中の一人も私でした。私にとって最初で最後の告白でした。それまであまり女性に興味がなく男友達と遊んでいる方が楽しかったからです。私は勇気をだして彼女を呼び出し「付き合ってください。」と紳士的に自分では言ったつもりでいました。しかし彼女は、「私タバコ吸う人嫌いだし、あの喫煙コーナーの人怖いもん。それに今とてもタバコ臭くて、ごめんなさい。」とぼっさりきられました。それでも私はどうしても彼女があきらめきれませんでした。何日か考えた末、私は行動をしました。まず、高校時代から愛用していたジッポのライターを捨て、まだおろしたての高校時代からの相棒赤ラクを、もみくしゃにして捨てました。そんな事が人づてで彼女の耳に入った様でした。私は、1週間ほど禁煙していたつらい頃、その日はバレンタインデーでした。彼女は、驚く事に私のもとに近づき「はいこれ。義理チョコじゃなくて義理飴どうぞ。」私にくれたのでした。まるで夢のよ

うな出来事でした。私は、直ぐに包みを切ると彼女が自分でトッピングした色々な餡がたくさん入っていました。私は、タバコを吸いたくなると餡をなめるといふ日々を続けていました。すると段々タバコが吸いたいという気持ちが遠のいていきました。その時気付いたのは、口が寂しいからタバコを吸っていたなんて、まるでお腹が空いたから指を口に入れる赤ちゃんと同じだと思いバカらしく感じました。また不思議な事によく言う飯食っての一言は、美味しいなんてあり得ないと感じ始めていました。なにしろ禁煙してからのご飯の美味しい事、美味しい事。タバコを止めるまで忘れていました。まあ、そのせいで多少太ってしまいましたが。まるでよく出来ている物語の様ですが、今ではあの時私に義理餡をくれた彼女が、私の妻となって栄養管理をしっかりしてくれています。あの時妻に会わなければ、いまだに超ヘビースモーカーで身体を壊していたかも知れないと思うと、とても恐ろしいです。今は、禁煙シールや禁煙ガムなどありますが、まずは自分の気持ち、周りの協力などで止められると思います。まずは、自分の改革意識が一番大事だと思います。今は昔とは違いだいぶタバコを吸う人の数も減って、大人でもタバコを吸う人が小さくなっている現在なので、頑張ればタバコを止められると私は強く思います。